

各関係機関長 殿

香川県農業試験場病虫害防除所長  
(公印省略)

平成31年度病虫害発生予報第1号の発表について

このことについて、次のとおり発表したのを送付します。

《予報の概要》

作物名	病虫害名	予想発生量
麦類	赤かび病	やや少
	<b>アブラムシ類</b>	<b>やや多</b>
モモ	せん孔細菌病	並
	うどんこ病	やや少
	ナシヒメシンクイ	並
カキ	炭疽病	並
	フジコナカイガラムシ	並
果樹の共通害虫	クワゴマダラヒトリ	並
レタス	灰色かび病	並
	菌核病	並
	斑点細菌病	やや少
	ナモグリバエ	並
タマネギ	べと病	並
	腐敗病	やや少
ニンニク	春腐病	やや少
タマネギ、ニンニク	さび病	並
野菜、花きの 共通害虫	アブラムシ類	並
	<b>ネギアザミウマ</b>	<b>多</b>

**太文字の病虫害**：向こう1か月の間、発生状況に特に注意を要する病虫害を示す。

\* 予報根拠中の記号

- (+)：発生量を多くする要因
- (-)：発生量を少なくする要因
- (±)：発生量が平年並になる要因

# 平成31年度 病虫害発生予報 第1号(4月)

## A. 麦類の病虫害

### 1. 赤かび病

予 想 発生量 : やや少

根 拠 (1) 31年産のはだか麦の開花時期は平年に比べ0～5日程度、小麦の開花時期は平年に比べ11日程度早いと予想される。(－)

(2) 4月の気象は、気温が平年並(±)、降水量が平年並(±)の予報である。

対 策 (1) 防除適期である開花始め頃の防除を実施するとともに、開花～乳熟期に気温が高くて天候不順が続く場合は、追加防除を徹底する。

(2) 病虫害防除所ホームページ(<http://www.jppn.ne.jp/kagawa/>)で、播種期別の開花期予想や防除に関する情報を10日程度の間隔で提供しているので、適期に防除を実施する。

(3) 圃場が過湿にならないように排水を徹底する。

### 2. アブラムシ類

予 想 発生量 : やや多

根 拠 (1) 3月中旬のはだか麦及び小麦での発生量は多かった。(＋)

(2) 4月の気象は、気温が平年並(±)、降水量が平年並(±)の予報である。

対 策 (1) 1穂当たり7～11頭(寄生穂率に換算すると60～80%)寄生している圃場では、早急に防除を実施する。

(2) アブラムシ類の防除により、害虫全般の発生を少なくする。

## B. 果樹の病虫害

ーモ モー

### 1. せん孔細菌病

予 想 発生量 : 並

根 拠 (1) 一般圃場での前年秋期の発生量は平年並であった。(±)

(2) 4月の気象は、降水量が平年並の予報である。(±)

対 策 (1) 発病枝は伝染源となるので、見つけ次第除去する。

(2) 発病後の防除は効果が劣るので、4月下旬から予防的に薬剤散布する。

(3) 病原菌は自然開口部(気孔、水孔等)や傷口から風雨とともに侵入するので、風当たりの強い園では防風ネット等の防風対策を行う。

### 2. うどんこ病

予 想 発生量 : やや少

根 拠 一般圃場での前年の発生は認めなかった。(－)

対 策 幼果期に薬剤散布する。

### 3. ナシヒメシンクイ

予 想 発生量 : 並

根 拠 (1) 県予察圃場のフェロモントラップにおける前年9月の誘殺数はやや多かった。(＋)

(2) 一般圃場での前年秋期の発生量はやや少なかった。(－)

(3) 4月の気象は、気温が平年並の予報である。(±)

対 策 4月中旬～6月下旬に、他の害虫との同時防除も兼ねて10日おきに薬剤散

布する。

－カ キー

1. 炭疽病

予 想 発生量 : 並

根 拠 (1) 前年秋期の発生量はやや少なかったが、一部地域で発生が多かった。  
(±)

(2) 4月の気象は、気温が平年並(±)、降水量が平年並(±)の予報である。

対 策 前年多発した園地では、展葉期に薬剤散布する。

2. フジコナカイガラムシ

予 想 発生量 : 並

根 拠 一般圃場での前年秋期の発生量は平年並であった。(±)

対 策 越冬虫が越冬場所から新梢に移動する展葉期頃に薬剤散布する。

－果樹の共通害虫－

1. クワゴマダラヒトリ

予 想 対象作物 : カンキツ、モモ、カキ、ブドウ、ナシ、ウメ、ビワ、  
キウイフルーツ等

発生地域 : 山林隣接園

発生量 : 並

根 拠 (1) 前年の県予察圃場での予察灯における誘殺数は平年並であった。(±)

(2) 前年秋期の産卵植物(アカメガシワ)での巣網の発生量はやや多かった。  
(+)

(3) 春期の産卵植物(アカメガシワ)周辺の雑草における越冬幼虫の発生量は  
やや少なかった。(－)

対 策 (1) 果樹園周辺部、特に雑木林外縁部での越冬幼虫の発生状況に注意する。

(2) 果樹園に侵入していない場合は下草の除草を行い、園内に侵入させないよ  
うにする。

(3) 幼虫の発育が進むと効果が劣るので、果樹園での発生を認めたら直ちに薬  
剤を散布する。

C. 野菜、花きの病害虫

－レタス－

1. 灰色かび病

予 想 発生量 : 並

根 拠 (1) 3月下旬の発生量は3～4月どり、5月どりともに平年並であった。  
(±)

(2) 4月の気象は、降水量が平年並の予報である。(±)

対 策 (1) 発病株は早期に発見し、抜き取って圃場外に持ち出すなど適正に処分し、  
直ちに防除を行う。

(2) 圃場の排水を良くする。

(3) 薬剤散布は株元を中心に、丁寧に行う。

(4) 苗床からの持ち込みも多いので、苗床での薬剤防除を実施する。

(5) 耐性菌の発生回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

2. 菌核病

予 想 発生量 : 並

- 根 拠 (1) 3月下旬の発生量は3～4月どりでは平年並(±)、5月どりでは発生を認めなかった(－)。  
 (2) 4月の気象は、降水量が平年並の予報である。(±)
- 対 策 (1) 発病株は早期に発見し、抜き取って圃場外に持ち出すなど適正に処分し、直ちに防除を行う。  
 (2) 圃場の排水を良くする。  
 (3) 灰色かび病防除に準じて対策を行う。  
 (4) 灰色かび病の耐性菌の発生回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

### 3. 斑点細菌病

- 予 想 発生量 : やや少
- 根 拠 (1) 3月下旬の発生量は3～4月どりでは平年並(±)、5月どりでは発生を認めなかった(－)。  
 (2) 4月の気象は、降水量が平年並の予報である。(±)
- 対 策 (1) 圃場の排水を良くする。  
 (2) 育苗は風当りの少ないところで行い、できるだけ傷をつけないように管理するとともに、軟弱徒長にならないよう注意する。  
 (3) ベたがけ栽培では、発生が多くなる傾向があるので、下葉に発生が見られる場合には早めに防除する。  
 (4) ナモグリバエなどの食害痕から発病している場合が見られるので、ナモグリバエの発生が多い場合には薬剤防除する。

### 4. ナモグリバエ

- 予 想 発生量 : 並
- 根 拠 (1) 3月下旬の発生量は3～4月どりでは平年並(±)、5月どりでは発生を認めなかった(－)。  
 (2) 4月の気象は、気温が平年並の予報である。(±)
- 対 策 (1) 苗床は防虫ネットで被覆し、成虫の侵入防止対策を講じる。  
 (2) 育苗期後半から定植時には薬剤をセルトレイ処理する。

## －タマネギー

### 1. ベと病

- 予 想 発生量 : 並
- 根 拠 (1) 3月下旬の発生は早生栽培、普通栽培ともに認めなかった。(±)  
 (2) 4月の気象は、降水量が平年並の予報である。(±)
- 対 策 (1) 越年罹病株は見つけ次第抜き取って圃場外に持ち出すなど適正に処分する。  
 (2) 圃場の排水を良くするとともに、窒素質肥料の過不足がないよう肥培管理する。  
 (3) 耐性菌の発生回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。  
 (4) タマネギと同一の病原菌によって発生するネギのべと病にも注意する。

### 2. 腐敗病

- 予 想 発生量 : やや少
- 根 拠 (1) 3月下旬の発生は早生栽培、普通栽培ともに認めなかった。(－)  
 (2) 4月の気象は、降水量が平年並の予報である。(±)
- 対 策 (1) 圃場の排水を良くするとともに窒素質肥料の多用を避ける。  
 (2) 被害残さを速やかに除去し、適正に処分する。  
 (3) 病原菌は茎葉の傷口から侵入するので、強風雨や農作業の前後に防除を行

- うとともに、ネギアザミウマなど害虫防除を実施する。
- (4) 同一の病原菌によって発生するニンニクの春腐病にも注意する。

## ーニンニクー

### 1. 春腐病

- 予 想 発生量 : やや少
- 根 拠 (1) 3月下旬の発生量はやや少なかった。(－)  
(2) 4月の気象は、降水量が平年並の予報である。(±)
- 対 策 (1) 圃場の排水を良くするとともに窒素質肥料の多用を避ける。  
(2) 被害残さを速やかに除去し、適正に処分する。  
(3) 病原菌は茎葉の傷口から侵入するので、強風雨や農作業の前後に防除を行うとともに、ネギアザミウマなど害虫防除を実施する。  
(4) 同一の病原菌によって発生するタマネギの腐敗病にも注意する。

## ータマネギ、ニンニクー

### 1. さび病

- 予 想 発生量 : 並
- 根 拠 (1) 3月下旬のニンニク、タマネギでは平年と同様に発生を認めなかった。(±)  
(2) 4月の気象は、降水量が平年並の予報である。(±)
- 対 策 (1) 発生状況に留意し、発生を認めた場合は早急に防除する。  
(2) 同一の病原菌によって発生するネギ、ニラのさび病にも注意する。

## ー野菜、花きの共通害虫ー

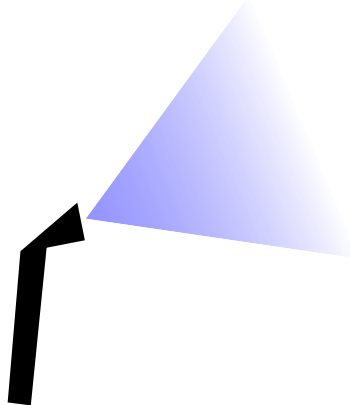
### 1. アブラムシ類

- 予 想 発生量 : 並
- 根 拠 (1) 3月下旬の発生は3～4月どり、5月どりレタスでは認めず(－)、4～5月どりブロッコリーではやや多かった(+)。  
(2) 4月の気象は、気温が平年並(±)、降水量が平年並(±)の予報である。
- 対 策 (1) 定植時には灌注処理や粒剤を施用するとともに、発生増加を認めたら早急に防除する。  
(2) 抵抗性の発達回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。  
(3) 今後作付を行う場合は、光反射資材や防虫ネットを張るなどして、アブラムシ類の飛来侵入を防止する。  
(4) 圃場内及び圃場周辺の除草に努める。  
(5) 施設栽培やトンネル栽培等では、今後増殖するおそれがあるので注意する。

### 2. ネギアザミウマ

- 予 想 発生量 : 多 (平成31年4月2日付け調査速報第1号発表)
- 根 拠 (1) 3月下旬の発生量は早生栽培タマネギではやや多く(+)、普通栽培タマネギ、ニンニクでは多かった(+)。  
(2) 県予察圃場の早生栽培タマネギ及び晩生栽培タマネギでの発生量は多かった。(+)  
(3) 4月の気象は、気温が平年並(±)、降水量が平年並(±)の予報である。
- 対 策 (1) 光反射資材を設置することで侵入量を抑制することができる。  
(2) 施設栽培では、黄色または青色粘着トラップを設置するなどして、野外か

- らの侵入に注意する。
- (3) 圃場内及び圃場周辺の除草に努める。
  - (4) 防除後も表土中の蛹や葉肉内の卵により新たに羽化、孵化する場合もあるので、多発圃場では7～10日間隔で防除を行う。
  - (5) 食害痕から病原菌が侵入するので、食害が認められる場合は早期に防除を行う。
  - (6) 抵抗性の発達回避のため、同一系統の薬剤を連用しない



近隣農地の作物等や住宅地等での農薬飛散防止の注意が必要です。  
風の状況を確認し、飛散の恐れがあるときは散布作業を中止しましょう

農薬はラベルをよく読んで使用しましょう

病害虫防除所インターネットホームページ

URL: <http://www.jppn.ne.jp/kagawa/>